

クラウディオ・アッカヴィーヴァについて —茨木銅版画シリーズの発注者に関する試論—

蜷 川 順 子

はじめに

昨年度末に関西大学出版部より刊行した『祈りの形にみる西洋近世—茨木の銅版画シリーズ〈七秘跡と七美德がある主の祈りの七請願〉』¹⁾では、1920年および1922年に茨木の千提寺・下音羽地区で発見された銅版画シリーズ〈七秘跡と七美德がある主の祈りの七請願〉（シリーズ全8点のうち2点は逸失。17世紀第1四半期、茨木市立文化財資料館）を中心に、そこで交錯するさまざまな歴史的状況や思潮を扱った。宣教師によって西欧から日本にもたらされ、茨木の山間部に潜伏していたキリシタンたちが秘蔵していたこのシリーズ（以下、茨木本）は、禁教令が解かれた明治初期以降の歴史的遺物探索の機運のなかで、大正初期に「発見」されたもので、内容的には聖書に記された「主の祈り」という絶対的な主軸に、「七秘跡」や「七美德」という宗教改革期に論争的だった諸概念が組みあわせられている。この構成をとることで、宗教戦争で顕在化したキリスト教社会の分裂を調整しながら、非ヨーロッパ世界へ拡張してきた西欧社会の、緊張と模索を伝えるものでもあった。

銅版画制作当初は、ヨーロッパ内のプロテスタント信徒に再改宗を促すためのものであったと思われ、同一図案に基づいて、複数の版刻や印行がなされている。そうしたシリーズや断片は、ヨーロッパの博物館や大学に複数点収蔵されており、上述の著作でも、1598年にリヨンで出版されたパリ本、ウィーン（シュレーグル本）、エアランゲン本、ダルムシュタット本、ストラスブール本、ヴォルフエンビュッテル本を、茨木本に先行するリヨン版として簡単に紹介し

た。断片を含めてこれら以外にも残されているが、リヨン版の原案は、シリーズ表紙のカルトゥーシュの銘文から、プロテスタントからカトリックへ改宗したドイツの銅版画家マテウス・グロイター（1564/66-1638）であることがわかる。

本シリーズの制作に当たって、神学者や聖職者の助言の有無は知られていない。彼の出身地シュトラスブルクも、彼が原本を制作したりヨンも宗教戦争の激戦地となったことがあり、カトリックの枠組みをもちながら、プロテスタントの批判点も考慮した、カトリック改革派的なイメージに対する需要も少なかった。

そこで、細部に散りばめられたモチーフや銘文の意味、描かれた儀式の分析を通して、すでにルネサンスを経験した文化の人文主義的要素、および、宗教改革を準備したと言われる古代キリスト教時代の意味を掘りおこすことで、シリーズ原本の意味内容がカトリック改革派的なものであったことを論じた。たとえば、美德などの抽象的概念は女性名詞であるために、古代の伝統にしたがって女性擬人像であらわされ、そのため画面では女性の司式者が図示されることになり、女性宗教者の活動を奨励する内容にもなっていたことなどがある。

茨木本は、原罪と婚姻の関係など、アジア宣教においてわかりにくいと思われる内容に、着衣のエヴァを描くなどの改変が施された、世界に一点しか存在しない改訂版である。その茨木本の制作時期や注文主について、欠落が多く読みとりにくいカルトゥーシュの銘文には、他の版のように原案の制作者の名前がなく、また発注に関係すると思われる書簡なども発見されていない。そのため、それらを特定するにはさまざまな条件を勘案しながら推論する以外に、今のところ方法がない。

茨木本制作がグロイターのリヨン時代であったとするなら、改宗して故郷を離れた彼にとって、これから注文主や販路を開拓しなければならない時期だったので、アンリ4世（1553, ポー-1610, パリ）の即位とナントの勅令以降の宗教的寛容の中で、再版も行われている人気のある本シリーズの改変を容易く認

めることはしなかったのではないだろうか。

リオンを離れてローマで成功するまでは、あまりローマ的ではない、すなわち、カトリック改革派的で、正統からはずれる点もあるこのシリーズは秘蔵されていた可能性もある。人気があったとは言え、教皇庁があるローマでリオン版がそのまま販売されたとは考えにくく、実際、正統派的改変をほどこしたガスパーレ・グリスポルディ（17世紀初頭）による類似のシリーズ（フランシスコ会博物館、ローマ）が、別途刊行されている。したがって、1611年の再版までローマでの新たな印行はなされなかったと考えられる。

しかしながら1611年に、前年のアンリ4世の暗殺の報を受け、その即位時に人気のあったシリーズの再版を目論む十分な理由が生じたと考えてもよいだろう。ただし、この出版のイニシアティヴをとったのはマテウスというより、アウクスブルクで活動していた、おそらく縁戚関係にあったクリストフ・グロイター（16世紀末-1633）であった。すなわちローマではなく、アウクスブルクのようなプロテスタントと同居しながらカトリック改革もさかんだった都市が新たな出版地になったのである。

これらを勘案するなら、茨木本は1611年のシリーズ再版時に、イエズス会が一たとえ1598年のリオン版の発注者ではなくとも—アジア宣教に用いるために改変を施して発注し、それが日本にもたらされたものではないか、と結論づけることができる。

本論は、このように同シリーズの意味内容や制作時期を絞りこんだ上で、発注者がイエズス会第5代総長クラウディオ・アッカヴィーヴァ（アクアヴィーヴァ）（1543-1615）だった可能性があることを指摘し、その蓋然性に説得力をもたせることを目的としている。

1. 茨木本表紙とカルトゥーシュの銘文

茨木本表紙〔図1〕の図像内容は、ヨーロッパに現存するリオン版のものとはほぼ同じである。画面は天と地とに二分され、その間に両端が装飾的に巻いて



図1 マテウス・グロイター案の模写、茨木本表紙，17世紀第1四半期，銅版画，31.2×21.6 cm，茨木市立文化財資料館

いる銘文帯が浮かび，そこに「天におられるわたしたちの父よ PATER NOSTER QUIES IN COELIS」²⁾ という主の祈りの冒頭が記されている。銘文帯より上は天上界を表しており，湧き上がる雲海の中央に，父なる神が座している。神は左手に十字架を冠した世界球を，右手に笏をもち，足元からは羽の生えた頭部だけのケルビム（智天使）が顔をのぞかせている。その背後では，降り注ぐ光が長い線によって，また，この光が生み出す陰影の濃淡がクロスハッチングの粗密によって，表されている。雲間に姿を見せる天使たちも，暗い影の中にあるもの，降り注ぐ光を浴びているものなど様々で，その階級も一様ではなく，会話を交わしているような天使たちもいれば，光源の方を見上げ

ている天使たちもいる。ただし、ほとんどがルネサンスのプット的な子供の姿をしている。彼らに囲まれた神に特徴的なのは、頭部の光背が通常みられるような円形ではなく、三角形になっている点である。

銘文帯の下は、地上界である。中央にある七角形のテーブルのような石造りの土台の周囲に13人の人物が座っているが、一番左にいるのがイエスであることは、光線を放つ四角形の光背をつけて祈りを捧げていることから分かる。したがって残るは彼の12使徒たちだが、左から3人目の闇に沈んでいる人物がユダだと思われる以外は、アトリビュートもなく識別が難しい。祈りを捧げる両手の組み方もまちまちである。中央にいる二人のうち右側の若い方がヨハネ、一番右側でキリストと対をなす位置にもっとも大きく描かれているのが、カトリック教会を代表するペテロである可能性が高い。

地上というキリストの位置は、改革派的な意味内容を示し、グリスポルディによるローマ版では、イエスは天上にいて、父なる神と聖霊の鳩と共に三位一体の図像を形成している。地上界の区画には多くの銘文が書かれているが、七つの角に祈りの炎が燃えている中央の土台部分に、「主の祈りの七祈願は、キリスト教会の七秘蹟と七美德に対応する」と書かれている。アーチ装飾の獣頭蛇尾の怪物に挟まれた、男性頭部を拡張させたような彫刻装飾のカルトゥーシュの文字は、リヨン版では「リヨンにて、マテウス・グロイター原案印刷、モノグラミスト NAFM 彫版 1598年 LVGDVNI / Mattheus Greuter inv. excudebat. N. A. F. M. Sculp. M. DXVIII」と読める。

茨木本のカルトゥーシュは欠損が多く、読みとれるのは「A.R.D.CLAVD. O / …ABBATI DIG.mo S.te / em Verone / Flan. D.D.」[図2]³⁾ だけである。浅野は「A.R.D. クラウディオ、ヴェローナの聖〇〇大修道院長〇〇, D.D. (制作?)」と読める可能性を示唆している⁴⁾。これに対してイタリアのグラフィックスに詳しいマリニは、ヴェローナは制作地を示すのではなく、この銅版画シリーズが捧げられた（あるいは認可された）聖ヨハネ修道院長（この間には長い欠落がある）クラウディオの出身地または赴任地を示し、Flan—当時のフラ



図2 茨木本表紙（部分）

ンドルを示すために用いられた一が⁴、制作または印刷された場所であるフランドルを示すのではないかとした⁵）。

2. A.R.D.CLAUD. O

茨木本の銘文にある「A.R.D. クラウディオ」に関して、クラウディオはあきらかに姓ではなく個人の名前である。1611年前後と考えられる時期のイエズス会の会員でもっとも良く知られたクラウディオは、1581年に37歳の若さでイエズス会の第5代総長に選出され、1615年のその死までおよそ35年にわたってその地位にあったクラウディオ・アッカヴィーヴァであろう。

彼はアブルツォ州アトリに生まれた。父は、高い地位や称号を有し、文武両面における業績と輝かしい功績により、かねてよりイタリア貴族の筆頭に数えられてきたこの名門の当主、第9代アトリ公爵ジャンアントニオ・ドナート・アッカヴィーヴァ・ダラゴーナ（1485-1554）であった⁶）。祖父のアンドレア・マッテオ・アッカヴィーヴァ3世（1458-1529）は、コンドッティエーロの人文主義者であり、その弟のナルド公ベリサリオ・アッカヴィーヴァ（1464-1528）もまた著名な文人であった。母は、カストロヴィッラーリ公ジョヴァン・パッティスタ・スピネッリの娘イザベラ・デ・スピネッリで、父であるカストロヴィッラーリ公は神聖ローマ皇帝カール5世の評議会のメンバーであった。

その伝記によると、彼は1543年9月15日の聖母降誕の祝日に生まれ、このことから生涯聖母に特別な献身を捧げたと言われている。また1543年は、1540年に教皇パウルス3世（在位：1534-1549）から認可されたイエズス会に課せられた、会員が60名を超えないという制限が撤廃され、大きく発展しはじめる年でもあった。

洗礼式では、アドリアーノ、フォルテブラッキオ、クラウディオという三つの名前が授けられたが、クラウディオが主たる名前で、その名前で呼ばれ、この名前をもつ聖人たちを守護聖人としていた。とくに6月6日に祝日があるブルゴーニュのベ・サンソンの司教聖クラウディオスを生涯模範としていたと伝えられる。家門のメンバーの輝かしい活躍に鑑みるなら、彼を特定するためにはクラウディオと呼ばれることの方が一般的であり、彼自身も他の洗礼名ではなく、そのように呼ばれることを意識的に選択していた。

それでは、銘文の「A.R.D.」をどのように捉えれば良いのであろうか。一般に名前が大文字だけの省略形で書かれる場合は、姓の前につけられた洗礼名の省略形である場合の方が多いが、この場合は洗礼名クラウディオの前に付けられているので、洗礼名の省略形ではないだろう。おそらくは、クラウディオの渾名もしくは尊称ではなかっただろうか？ たとえば、クラウディオの手紙や著作の表題には、*Lettere del R. P. N. Generale Cludio Acquaviva* という書き方がなされている⁷⁾。この R.P.N. は、「われらが尊父」R(everendi) P(atri) N(ostro) の略語である。これを参考に A.R.D. を、たとえば「アッカヴィーヴァの、尊敬すべき信者」A(quavivae) R(everendi) D(ivotione) などと読むことが可能ではないだろうか。彼の伝記の中に、今のところこの組み合わせの略語は見いだされないが、それぞれの単語を取りだすことができる。このことから、銘文に読みとれるクラウディオは、イエズス会総長を指す、おそらく広く知られていた尊称ではないかと考えられる。

3. …ABBATI DIG.mo S.te / em Verone

(下線部は、Leuschner 2016による転記)

銘文の続く部分に関して、マリニや浅野は em を *nis* と読んで、「…ABBATI DIG.mo S.te / *nis* Verone」となる可能性を示した。「ABBATI」は大修道院長や聖職者を指す *abba* または *abbas* の与格であり「大修道院長に」と読むことができ、「DIG.mo」は、おそらく「威厳ある」または「気高い」などを意味する形容詞 *dignus* あるいは *dignitas* の最上級与格で、「いとも気高き修道院長に」という意味になろう。さらに「S.te / *nis* Verone」は、*Sancte Johannis Verona* となり、ヴェローナのサン・ジョヴァンニ（ヨハネ、ヨハネス）聖堂/修道院に関係するらしいことがわかる。

クラウディオ・アッカヴィーヴァの生涯を概観するなら、ローマは別格として、活動に関連して長期過ごした地名として、若い頃に学んだペルージャやナポリが挙げられている。彼は1566年のペスト流行に際して献身的なイエズス会員の活動に感銘を受けて、翌年ピウス5世（在位：1566-1572）の祝福を受けて同会に入会するが、当時の総長フランシスコ・ボルハ（1510-1572）の元で修練した後、ナポリの管区長になり、その後ローマの管区長になった。1580年にはイギリス伝道団にも加わるが、同年第4代総長エヴラル・メルキュリアン（1514-1580）が死去すると、翌1581年2月7日に第4回総会が招集され、まだ37歳だったクラウディオが次期総長に選出されたのである。

イエズス会のフランチェスコ・サッチーニ（1570-1625）が著わしたクラウディオの伝記では、ヴェローナに関してヴェローナ枢機卿アゴ스티ーノ・ヴァリエール（1531-1606）の名前がみられるが、好意的には扱われていない。彼の名前は、外国での宣教師を育成することについて述べられた箇所、「説教者たちが、雄弁よりも靈魂の修得のためにもっと勉強し、平凡な才能でも偉大な靈魂が、乏しい靈魂の偉大な才能より、どれほど多くのことをなし得るかを例示する」よう命じられたカルロ・レジオ神父からの引用の後に登場する。

「クラウディオによれば、ヴェローナの枢機卿ヴァリエールは、熱心で理解ある聖職者であり、教会修辞学を自らのもの」としているが、「説得や魂の改宗以外のことに作用する概念、雄弁、作曲、身振り、歌」を取りいれている輩の「虚栄」に感嘆することもあった⁸⁾。

またクラウディオの読書に触れ、彼がそれらの中から優れた文章や霊的な動機が含まれている箇所を選んで、さまざまな指示や訓戒や手紙の中で用いたことを伝える箇所では、ヴェローナの枢機卿が、同じ読書をして「その中にある真珠や尊い喜びを見分けることができなかったと告白した」ことを書き添えている⁹⁾。

アグスティーノ・ヴァリエールは、ヴェローナ司教でもあり、行政や懲戒手段によってトレント公会議の決定を実践に移すカトリック改革派的な司教で、オラトリオ会を創設したフィリッポ・ネリ（1515-1595）のキリスト教人文主義の追隨者だったと言われている。1565年に司教に就任してからは改革派の前任者ジャン・マッテオ・ギベルティ（1495-1543）の路線を引き継ぎ、カルロ・ボッロメオ（1538-1584）によるミラノの改革モデルを参考にした。彼は1576年にイエズス会にヴェローナに学校を作るように求めている¹⁰⁾。

ところで、茨木本の「ヴェローナのサン・ジョヴァンニ修道院/聖堂のいとも気高き修道院長/神父に」と読める銘文の指し示す人物を推測するには、サン・ジョヴァンニが手がかりになる。ヨハネに献堂される聖堂は少なくないと思われるが、現在のガイドブックに掲載されている限りにおいて、サン・ジョヴァンニ修道院はヴェローナに存在しない。近郊の自治体にあるものを除くと、教会堂としては福音書記者に献堂されたサン・ジョヴァンニ・イン・フォロ、洗礼者に献堂されたサン・ジョヴァンニ・イン・フォンテ（ヴェローナ、サンタ・マリア・マトリコラーレ大聖堂附属礼拝堂）、およびアディジェ川をはさんで大聖堂の反対側にあるサン・ジョヴァンニ・イン・ヴァッレがある¹¹⁾。

ここで注目したいのは、ヴェローナでもっとも古い教会のひとつサン・ジョヴァンニ・イン・ヴァッレである。この聖堂はおそらく4世紀の初め頃に、か

つての異教徒のネクロポリスや太陽神殿があった場所に建てられたと思われるが、ヨハネへの献堂に関する正確な記録は存在しない。はじめはアリウス派の聖堂だった可能性が高く、7世紀末に正統派の教会となった。その後、教区教会になったり、さまざまな修道院に土地を貸していたりした記録がある。また、1392年にはこの教会で「修道院のような生活」が営まれていたことから「修道院」と呼ばれていた記録がある¹²⁾。したがって、「ヴェローナのサン・ジョヴァンニの修道院長」とは、この教会の司祭であった可能性が高い。

このことは、司教座があった大聖堂の、ヴェローナ司教兼枢機卿ヴァリエールの活動に、クラウディオがやや批判的であったことと符合する。すなわち改革派であったヴァリエールの、トレント公会議の決定にしたがう、ややもすれば逸脱的な芸術の使用をクラウディオは警戒していた。その一方で、外国宣教を推進する中で、図像の使用を積極的にすすめていた。したがってクラウディオは、大聖堂に匹敵する力をもっていたサン・ジョヴァンニ・イン・ヴァッレの司祭に、茨木本シリーズのフランドルでの制作（上述の Flan. D.D. の解釈に基づく）を命じたのではなかったのだろうか？ 同シリーズは、すでに述べたように改革派的な内容をもちながら、主の祈りという絶対的な基軸に、論争的な秘跡と美德とを統合した正統派の体系を堅持していたのである。

ヴェローナが選ばれた理由については、枢機卿ヴァレリオの改革とイエズス会の関係、およびサン・ジョヴァンニ・イン・ヴァッレの役割を視野に入れたさらなる検討が必要だが、以下に触れるように、北イタリアのイエズス会の動向にクラウディオは必ずしも同調していない。ここでは女性聖職者に関するクラウディオの対応に触れることで、茨木本に関わる思潮に触れておきたい。

4. 茨木本にみるジェンダー問題

すでに述べたように、茨木本にみる図像上の改革派的要素は、表紙でイエスが地上に座っている点や、擬人像が女性であるために、女性が司式者として表わされている点に認められ、当時活発になっていた女性聖職者の活動を後押し

するような内容になっている。

たとえば第一の請願〔図3〕において、ページの一番下に第一の請願の文字があり、上方では、主の祈りの第一請願「み名が聖とされますように。SANCTIFICETVR NOMEN TVVM」の文字が、天上から降りそそぐ光の源を弧状に囲むように浮かびあがる。この請願は、左下に書かれた「信仰 IN / FIDE」という美德¹³⁾と、右下に書かれた「洗礼 AD BAPTISMI / sacr,m」という秘跡に対応している。画面の中央には髪を垂らして、薄手の生地を重ね、レースの縁取りがある法衣をまとい、広げた羽をつけた「信仰 Fide」の擬人像が、洗礼の司式者として、両手を合わせて光源の方を見上げている。



図3 茨木本第一請願「洗礼，信仰」17世紀第1四半期，銅版画，32.7×21.9 cm，茨木市立文化財資料館

背景では、向かって左手にヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼を受けるイエスの姿があり、その頭上には天の裂け目から降りてくる聖霊の鳩がいる。向かって右手には、屋根に十字架がある円形の古代風あずまや、または神殿で、5人の人物に囲まれたイエスが女性に洗礼を施しており、その外ではさらに二人の人物が洗礼の順番を待っているようだ。福音書には女性に洗礼を施す記述はないため、描かれた場面を『マタイ』15:21以降、および『マルコ』7:24以降に記された、「悪霊にとりつかれた娘から、汚れた霊を取り払うよう、母が主の前にひれ伏しているところだ」とみなす研究者もいるが、この文言は洗礼とは関係がないので、聖書の記述とは別に女性への洗礼を意識した描写だと解釈することができる。洗礼を施された者は、次に洗礼を施す者となるため、ここでは洗礼者ヨハネの役割がイエスに引き継がれ、さらに前景に大きく立つ女性司式者に引き継がれる画面構成になっていることがわかる。

彼女を挟むように立つ石碑に書かれた銘文には、向かって左に「第一の請願（擬人像）は聖職者の服装をしている。なぜなら、彼女は聖なるつとめ、とりわけ洗礼のつとめを果たさなければならないからである」という内容が記されている。

5. イエズス会のジェンダー問題

上述のような仮説をたてるなら、設立から現在に至るまで男子修道会であったイエズス会において、女性が司式者であるイメージがどのように理解されていたのだろうか。ここではこの問題を、クラウディオが総長であった期間（1581-1615）に、イエズス会の全体の統治原理である「服従」と、イグナチオが提唱する『靈操』を通して形成される個人の完全性への意識（デカルトやアピラのテレサとも通底する近代的個の意識化）の狭間にあったイエズス会の思潮に関するシルヴィア・モスタッチオの論説を参考に考察したい¹⁴⁾。

聖書の中には洗礼を受けた女性は登場しないが、イエズス会のみならずそれまでの多くの修道会の教父たちは「組織や個人の経験的側面を考察するため

に、女性—とくに神秘主義的な女性—を利用して、一個人に対する聖霊の顕現」のあり方を探った。そうした女性たちの中には、完全な生とその具体的な相についての正確なヴィジョンをもち、発展させることができた女性も少なくなかった。

16世紀から17世紀にかけて、イエズス会と女性たちが出会う場の多くは、イグナチオに啓示された方法である『靈操』を実践する修練会にあった。ミラノの聖フェデーレ教会で教鞭をとっていたカルロ・グレゴリオ・ロシニョーリ(1631-1707)は、17世紀半ばに著述した『イエズス会の創始者聖イグナチオの靈操に関する覚え書き』(ボローニャ、1699年)において、女性信徒や修道者に対するイグナチオの実践の成果に触れている。これらは、イエズス会士と女性たちの司牧的成功のみならず、彼らの協力と結託とを証言するものでもあった。このような女性たちの接近はイエズス会中枢や地元の聖職者の非難を引き起こし、男子修道会の伝統の邪魔になるような、女子部の創設やイエズス会の規定に基づく女性機関の設立は、強固に反対された。また女子修道者による修練会などの実践も厳しく規制された。これらは、告解における性的勧誘の告発の恐ればかりでなく、イグナチオの信奉者たちが、神秘主義的な女性の修道生活に関心をもっていたことへの警戒にもよる。

イグナチオが初代総長であった時期の会員には、アランブラディズム—15、16世紀のカスティーリャ王国におけるキリスト教神秘主義的实践の一形態で、異端審問の対象になった—が常につきまといっていたと言われるが、第3代総長のフランシスコ・ボルハは、イグナチオとは異なり、観想を重んじる預言者主義に傾倒し、異端審問や新大陸の植民地政策に批判的な立場をとっていた。

第4代総長は、はじめてイベリア半島以外の出身者であるベルギーのエヴラル・メルキュリアンが就任し、その在任期間は、「脱スペイン化」とイエズス会をより国際的なものにしようという動きによって特徴付けられる。彼の死後総長となったクラウディオの時代でも、引き続きイベリア半島的な神秘主義的から脱却し、禁欲主義へと移行した。当時のイベリア半島には、神秘的

な才能を誇る女性たちと精神的な父性の関係を結んでいたことで告発される多くのイエズス会士がいた。

6. イザベラ・ベリンザーガの事例研究

モスタッチオによる二つの事例研究のひとつは、16世紀末にミラノのイエズス会士アキッレ・ガリアルディ（1537-1607）がイザベラ・ベリンザーガ（c. 1551-1624）におこなった霊的指導の具体的な事例である。1580年代には、イグナチオの『霊操』の対象や範囲や使用方法に関して、北イタリアを中心に激しい理論的再考が行われていた。ガリアルディはこの問題に関して権威者であることが主張されていた。

ガリアルディは、貴族の女性イザベラ・ベリンザーガの霊的指導を通して、修練を理解し活用する方法を試した。イザベラは、伝統的な女性の修道生活の形式を改革し、修道院の外で生活し祈りと観想の生活を送る女性に、その貢献を認める余地があると確信していた。イザベラの知恵と祈りの中で神の声に耳を傾ける能力は、多くの若いイエズス会士をひきつけ、1583年に日本へ出発する直前にイザベラを訪れたセルソ・コンファロニエリは、仲間に手紙を書いて彼女の祈りにあずかることを勧めている。

当時のミラノでは、社交クラブ的ではない、女性のための修道生活のさまざまな体験活動が盛んであった。こうした活動をすすめたグループは、社会活動と女性的な教会共同体の新しいモデルを準備していた。たとえば、聖アンナ寡婦会（1570年設立）のような団体は、困窮する若者のために活動し、一方、1576年に共同生活をはじめたウルスラ会は、女子に対するキリスト教教育をそれまで以上に行うようになっていた。これはトレント公会議以降、伝統的な修道会に縛られていた女性に課された、修道院への囲い込みの義務を避ける目的もあった。このような新しい経験や修道生活の試みの多くは、イエズス会の神父たちによる精神的な指導の下にあり、イエズス会の支援を受けていた。

ガリアルディとイザベラによる修練を綴った体験談は、1585年以降修練書と

して広まっていた。ガリアルディは1601年に改訂作業を行い、イザベラの直感と感情を、消滅の道（意志の消滅、すなわち従順）の完璧さに関する小冊子に整理した。

しかしながらクラウディオは、1588年にすでにイザベラの教義とイエズス会教父たちの関係を評価するために2度にわたって神学者ロレンツォ・マッジョを派遣した。不利なことは見つからなかったが、彼はミラノ管区長に二人に節度を促すよう要求し、クラウディオにも会をむしばんでいる要素に対する指導を求めた。

しかし全体として、マッジョはガリアルディが提示した神秘的現象の合理化を評価し、テキストの簡単な修正を求めただけであった。ミラノは、主観的な照明により多くを割き、中央当局から権力を奪うようなモデルを通そうとし、クラウディオたちがイエズス会の経験の基本的な構成要素の一つであると感じていたものを弱体化させた。サッキーニによって書かれたアッカヴィーヴァの最初の伝記は、イエズス会を壊そうとするこのグループを「虚栄に満ちた改革者の一派」と呼んでいる。

ミラノに近いヴェローナの枢機卿に対するクラウディオの批判的な態度は、北イタリアに広まっていた神秘主義の台頭と、異教的なイタリア・バロックへの接近に関係するものであろう。クラウディオは会の運営方針について精力的に構想を練っている間に、イエズス会が構成されるべき精神的な側面を数えあげ、同時に、祈りの実践とすべての人のためのイエズス会士養成における標準化を可能にするような統治手段を模索していた。このことを念頭に置いて、イエズス会の祈りの時間と方法を規制した。1590年には、祈りに関する有名な書簡で、より多くの会員が共有できるような方法と内容のバランスを提案した。サッキーニは、このイニシアティヴについて興味深い見解を添えている。彼の意見では、総長は、神秘主義的で異教的な「恍惚的な方法」は神の意志に反するものではないものの、検証が困難であり、そのためイグナチオの学院には適さないという見解を主張したのである。

イザベラは、本質的に女性の修道生活の改革に焦点を合わせていたが、この問題自体は教会全体のより広範な改革の（不可欠なものではあったが）一つの要素に過ぎないと考えられていた。彼女は、イエズス会の会員との交流と靈操の活用によって、内省と行動の手段をも開発した。修練は、祈りの方法であり、自分の内なる声に耳を傾ける方法であった。彼女に奉仕したイエズス会士たちは、必ずしもその目的を共有していたわけではなかったが、それでもその出会いは強烈で、その影響は相互に及んでいた。

16世紀後半から17世紀にかけて、ヨーロッパでは女性の主体性のための空間が徐々に形成されていった。この時代、多くの半宗教的女性グループが社会活動に参加したことはよく知られ、とくに教職に就いていた。女性教師という形で彼女たちが作りあげた新しい姿は、その後、社会の枠を超えて何世代にもわたって子どもたちに影響を与え続けた。

1612年にはすでに、クラウディオは、フランコ・ベルギーの管区長に宛てて、イエズス会に触発された女子学院の設立を妨げるべきであり、いかなる司祭もそのような女性たちの靈的指導をしてはならないと書いている。クラウディオはこの立場を取ることで、女性に関するイエズス会の公式な立場を明確にしようとしていたわけではない。しかし、同時に彼は、長い間イエズス会と衝突してきたイギリスの国教会聖職者の支持者たちによって、すでにイエズス会に対してなされた種類の非難からイエズス会を守ろうとしていた。イングランドの大司祭ウィリアム・ハリソンは、悪意をもって彼女たちを「イエズス会女」と名付け、教皇の前で教会の指示に背いたつまり異端であると非難した。さらに彼は、彼女たちの活動が修道院という一定の場所に限定されるべきことに抵触するだけでなく、公の場で宗教的な事柄について話すことを求める積極的な教職に就いていることを問題視した。

女性の活動に関する問題の核心は、聖性はすべてのキリスト者に可能であるというイエズス会やサレジオ会の新しい靈性から生まれたものであった。しかしながら、彼女たちの場合、さらに大きな抵抗があり、逆説的ではあるが、イ

エズス会には女性の信徒がいなかったからこそ、彼女たちの試みが発展することができたとモスタッチオは述べている。

7. 結びに代えて

茨木の銅版画シリーズが、他の版本と大きく異なるのは結婚の秘跡において着衣のエヴァが描かれている点である [図4]。本論では、この変更を指示し制作させたのは、損傷の激しい銘文に残る断片からイエズス会第5代総長クラウディオ・アッカヴィーヴァだと仮定した。リヨン版にみられる豊満な裸体を着衣にしたのは、アジア宣教を念頭において考慮されたと考えられる。そこに



図4 茨木本第六請願「婚姻、賢明」17世紀第1四半期、銅版画、31.3×21.6 cm、茨木市立文化財資料館

はコレッジオ・ロマーノの学友だった東インド管区巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ（1539-1606）からの助言があったかもしれない。さらにルネサンスからバロックにかけての異教的な傾向に対する批判からも、この指示がなされたのであろう。

これ以外にみられるカトリック改革派的な要素の中には、女性の修道会を認めないクラウディオの主張と相容れない部分があるが、彼はイエズス会以外での女性の活動を認めないわけではなく、このことは、聖性は全てのキリスト者に可能であるという近代の新しい霊性を背景に生まれた思潮であった。その意味で、茨木本の原本でありリヨン版は、必ずしもイエズス会が発注したものではないが、改訂版をすすめて宣教のために日本にもたらしたのは、茨木本のカルトゥーシュの銘文から推察されるように、クラウディオの指示によるものだったと推察される。

注

- 1) 本稿の前提となる内容の初出は、蜷川順子『祈りの形にみる西洋近世—茨木の銅版画シリーズ〈七秘跡と七美徳がある主の祈りの七請願〉』関西大学出版部、2023年 の文献一覧にまとめた。以下の叙述で、一部を除き、とくに参考文献をあげていない内容は、これらに基づくものである。とくに第1節および第4節は、蜷川 2023 より転載した。
- 2) 2000年2月15日に日本カトリック司教協議会が認可した訳文を用いた。
<https://www.cbcj.catholic.jp/2000/02/15/15311/> 2018年11月16日確認
また聖書の引用は、『新共同訳聖書』日本聖書協会、2004年版を用いた。
- 3) Eckhard Leuschner, ed., *The Greuter Family Part 1, Matthäus Greuter*. Compiled by Jorg Diefenbacher [The new Hollstein German engravings, etchings and woodcuts 1400-1700]. Rotterdam: Sound & Vision Interactive, 2016, p. 106. 浅野ひとみ「いわゆる《天使讃仰図銅版画》に関する新知見」『千提寺・下音羽のキリシタン遺物研究』科研費補助金研究報告書（長崎純心大学）2014, p.76 では、「A.R.D. CLAVD (I) O / …ABBATI DIG.mo S.te / nis verone / Flan. S.D.D.」
- 4) 浅野 2014: 75-76. 坂本満編「初期洋風画」『日本の美術』至文堂、1973, p.80 は、茨木本を「ヴェローナ版」と呼んだ。
- 5) ウフィツィ美術館のジョルジオ・マリニ（グラフィック専門）は2017年8月に、筆者に対してこの銅版画シリーズの構成に鑑み、ドメニコ会の注文である可能性も示唆した。

クラウディオ・アッカヴィーヴァについて
— 茨木銅版画シリーズの発注者に関する試論 — (蜷川)

- 6) Francesco Sacchini S. J., “La vita di Claudio Acquaviva,” in Alessandro Guerra, *Un Generale Fra Le Milizie Del Papa*. Universita Degli Studi Di Roma “La Sapienza,” 2003, p. 165 ff.
- 7) Lettere e carteggi, Claudio Acquaviva.
https://it.wikipedia.org/wiki/Claudio_Acquaviva [2023年6月10日確認]
- 8) Sacchini 2003, pp. 244-245.
- 9) Sacchini 2003, p. 250.
- 10) Agostino Valier.
https://it.wikipedia.org/wiki/Agostino_Valier [2023年6月10日確認]
- 11) *Veneto, Guida d'Italia del Touring Club Italiano*. Milano, 1969, pp. 118-119. ヴェローナ大聖堂には附属修道院があるが、聖ヨハネに献堂されていない。Verona, *Le chiese storiche/Historical churches: San Zeno, Duomo, Sant'Anastasia, San Fermo*. Verona: Associazione Chiese Vive, 2016, pp. 26-45.
- 12) Chiesa di San Giovanni in Valle.
https://it.wikipedia.org/wiki/Chiesa_di_San_Giovanni_in_Valle [2023年6月12日確認]
- 13) 『コリントー』13:13に基づき対神徳と呼ばれる三美德（信仰、希望、慈愛）のひとつ。ここでは、J. ホール『西洋美術解説辞典』11版、高階秀爾監修、河出書房新社、1999, pp. 271-72 の訳語を用いた。
- 14) Silvia Mostaccio, *Early Modern Jesuits between Obedience and Conscience during the Generalate of Claudio Acquaviva (1581-1615)*. Farnham: Ashgate, 2014. ここではとくに、第4章（105-154ページ）の「ジェンダー的服従？イエズス会士と女性の霊操：二つの事例研究とその背景」を適宜参照した。